餘身歸

全

黄

159.
D34y

011510-000-0

159-D34y

余身帰

伊達 自得／著

M10

AAE-3198

伊達自得老居士著

餘身歸

明治十年春三月

明教書肆藏梓

国立国会図書館 29.7.22

全

336483

餘身歸序

苦樂者人世之常也以苦為苦以樂為樂者常人而迷寡若也至於迷之深志不獨以苦為苦而又且以樂為苦矣若夫悟道之人則厭苦樂為一情晝夜之如終歸之故在苦境而不為苦所囚繫在樂境而不為樂所迷溺主宰

餘身歸

澈澄如光風霽月、其心志澄清泰定、
如明鏡止水、雖世力錮鼎鑊之中、瘴烟毒霧之
地、而精神偉然、生氣於八極、莫之能夭閼、志雖
貴功名之傷順、順性之時、而其心不為加毫
髮、若鶴立溟、常能樂道樂、不使其轉而
為苦也、嗚乎、若人豈易得哉、其人豈易得哉、
自得翁志、庶幾乎翁、苦心事被禁錮、志十年、
後又被囚三年、其境可知、苦矣、其居處之
況久矣、然翁視以為公署、惟為轄然、未嘗
箕踞、時常手一部藏經、晨夜閱覽、心之澄
以此自樂、翁本瘦弱、自病然、至囚十年、羸
瘠惡、僅七日及出獄也、身體堅強、肉色肥好、
自知在苦境、而能樂志、惡能如此、後翁
著一書、錄其囚時事、欲曰餘平、蓋蘇

生之喜也嘗謂余佛書只人樂苦之煩
嗟乎苦樂相因被之臨時者常人也常人
苦苦境而能得樂乎在此地而能得樂
乎如有志心地光明超脫乎苦樂者
乎所謂未嘗而樂其得藥生也宜矣藥
乞余跋一言因書此之云
明治十年二月十三日 敬宇中邨正直

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]古人[illegible]

[illegible]

明治十年二月　三島毅中洲

159D34y

餘身歸

[illegible]ふ[illegible]式夜見といふ[illegible]
らまとめ[illegible]出[illegible]餘美かへ[illegible]と名は[illegible]
[illegible]を[illegible]天地と頼[illegible]
[illegible]雲隠[illegible]の[illegible]と兼り畏り[illegible]
執行ふ[illegible]係[illegible]
[illegible]と[illegible]遍下さる頃[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]只[illegible]

海の色にて社をあらはすと思ひ決めて高く山
を出る河をくだりとゝ一名鹿の背といふ

羽目山のる茅とのを山城坂のあるよりて
里にあるなるべくこの海の海の色にて見るに鏡
あのこの色をいと人よりも苦しとゝ所ふやうれて常に
口号ふることなのらるふ者むをあを無しり又
まをあいまをと西行法師とく古より歌
海のあるを橋界よりいらされは岩実のあハ
祥にけりかの海苔のすわんの言をの物を
彼をよりく夕着ゝ歩をまるを除根をを何れ

祥に豆をと絵かりるる紙をこ所をを
はをり果ゝ罪ゝこのれへを母を豆の世をく
をを記絵ををらはいとかくをるるをよ家家
をり此髪をけつるひををへいとをのりし紙何
為をいとを明くはをくと禄居るれをを年ゝと毎
をく彩ををを

出を蓋く器をあれわ姫をあるを色をを世乃
をを色あつら姫
蓋こ茶と籠こ出色ら
者を色時つ祥を

門に入て松風小春まで奴家やともに甚しきまで
とく人々いふなり畏られとも我御慈悲の御為にはは
ままに答ふる懺悔ふかく此を法華経を称りて積
誦した事なき者を以て何事も是仏の法と
めまで云ふとに詠る歌に

西山や月の御かげにさそはれて寛まに
ゆきて入るとはなんとの事

此は月の御蔭をあふぎて西へ向き
佛と法の道ぞに執心
皆読誦の事まで鏡背に写ひ流ふらむ地

是れは白家が集部なるかりてなさいしかし
世には佛といへは罵り法とは唐には謗るを標ぼ
るとなりへかきる無道き世の漢やからを儒博士
みなさる人婦りければ私の慈悲にて深く経論
を辯へ了義不了義を分ちては何事もあらん滿
してそのまゝの比類無帰縁縁設何の名はりと
世に志ら受陰入界何たる法なりとも法とらぬ一
四句偈たる物を以て心をふさげて罵り譏りし
やまごとにぞ少しも云ふ者も八に富士の松を
見ぬ人して云ふ高僧が論ひ近江の海をたる志らずして

生涯源を測る能はざる志を抱きて社思の浅き一つのみ殺者の生涯究竟の理に非ずとなす
学問もひとりて近き寺に一切義経あり高き
ものとて出でもとを学ばれ猛論なるものを
ものみ為りしを深く大恵禅師の書を見て始めて
るものの多き中に海内近き不ると雖も漢洲
者れども物とふ技藝のあるものは何ら文事を識
ずして友を求めれば生狀深山幽谷の中にこれ
て掘りの学勤むるに似たるものなれば人と
学問のほとのるものなれば海内近き不ると雖も漢洲
のものに日夜送る所の境界愛憎一物絶
ものなる可し

海内を遊ぶ漁父に出でんと海人の子乃ち
勢利を使ふ者なれば武を拭ふ
ある夜の宿夢に
古里に出でい通ふ養病のこと
吳守の所
思ひきて来て家郷のこと語りける者を見て人に
いつちの所へ

きしめおかど無たゞ笑中のいとをかしくて
まおる結の碓ねとさの里いのる男ふつまきぬ
まあれい飲せり計り星
夢お楼し水際のみ女杉菅をて何耳情なき
敎いのおなるら無碌
たし湯まて其儿ある無手拂しける女男子
さと風の懐にきるら経
枝むてし三角楠のちりくと流まてこのらま
世をすてつるこの邪かく誠るおれの末にと
問しきのあるおこてめあれいせわ大この宝かや

う比るのゝ獨ころれてありし字おのつのらせ
し深いうとへ字来るたまゝしくせるこどもあまて
從前の兵想悲く一枝の夢と申すぬ
此て也始何の上うけき穿背の樣る手き
せする物をそありける
難うかしんの貌を引こへて流の林中
おちふきとめあたく
瑜伽師地云怨親品無ㇾ有二決定眞實一可ㇾ得何以故親
品餘時轉成怨品怨品餘時轉成親品是故無ㇾ有二決
定一とあるのこゝて

336483

夏夜そそよ給もるゆ
ゆしまはいからぬ
安東梨詞おこるゆそ学の中いと強く
謀ゆ浦の濱を奪東とそ浦人強く
里ふらこそ以騒よりて軍を囲ふる業伝
ふと以つて動を競ふとて出あ安東も物の者
板書と難く時中紙い
囲ふる於兵の者見元者とそ東き渡る
学の東を之の形
出東却軍の於ふ兵人きらよ者を出

どうおもひの安東ゆ
花山ふたふれかそ烟馬出ら妙耳ふり面
てん風の於ふの形
此あ東りか浦奪と以ふ変を参りきて願事あ
るそ〜まて軍起るもゆ安あ東出強ふとも
以ふ安と片を〜まひふ安まて
ひこそ元安の川をそらと神集出安りまて

らまふ安動の〜
東とおもひつくる於ふそらおそらよいひきの寺
去甘ゆ里を安く大宣伝伝まて出年 の年

はるゝ　なまぬとゝひのむすめ
あまぶねとは代の婦人より毎月五日六日の夕
つの面形あいみしくふりはてゝ見るものきゝあまのと
家居とたふ稚妙海の嶋とゝろくわとふ新あふ人
はつのるとおらむはるゝふ新きへうちあひて相
乃業ゐいを武かあまの家居の変をあやふ
しとて近き所を関鶏文とて熊野平二社たえ
しまはをあまのかたらふへきまもれ
てあるかとは相ものうら婦ゐる子孫ゐ多
町乃かゝを城きれい火燃あこのわてをやけよ

やまぬやうゝふ夜を明ふあまれとたゝ同しきゝ家あ
祝ハらふ仮穂を告りて七日ゝこの里なる武ゐ
る以ほとれこと変しくいふ屋くゝ阿ら更ゐ
新変ゝ流生ゝ家ゝ行くゝ忘しきゝ見るゐいの船る
歩くゝ四の契ゐ羅年人のうへゝゝその理ゐなきを
のハあらぎわゐ里ゝこの里の家わを有るわとを人
あまをゐる新

四ふ山ゐきまゝふ見れい実きゝ毎と来るゐ
ゐかい行ふ四ゝこの
契ゐ行ゐ浦の新ゐきゝ行ゐ梅戸ゝひゝ

なるべし 神通なる者

仏意の形化無量なるべし 像を作らば人形よりまさら

ず九相等の月輪

経に六種震動といへる無量動起踊震吼擊の六

種形を動とあり 地きたりて動くこと

きたりて動くこと 地の震動いふを

地震なりとあり地震しく志量数震動いふを

まさに風あるを立起るの如く或を踊量あるを

如くあるを吼るの如くあるを擊ることくなむ

あるを阿含に地動因縁八あるといへる中に地在

水上水止於風々止於空々中風大有時自起則大

水擾大水擾則普地動と見えたり次脚に搖動四

大に因て思ふに佛経に四大地水火風四微色味觸相

待して風を動性とはなるに地を四微を具

て重きなり故に動くこと能はず堅性とは水に三

微色味觸を具して重きなり故に動くこと能はざるの如くなり

是を濕性とは次に二微色觸を具して炎上の如くなり

是を熱性とは風を一微觸のみにて勢急なり

是を動性とはなり因縁によりて風大動とはいへる

なりされば動搖形を動るを時を地水火を動なれ

ば風動と云次動と云を大なる遠を行るまし

これは名思量子のよろしき文にて説たりいはれなれど
朕兆いまだ萌さゞる一氣始發の消息は筆意識
情思量子の所謂にあらざるへし此湯釜に入むと
いふ名はあらず又茶湯豆波の義ならむ此の如く茶
のこと葉を數とはに涌あるのありて陰にまたはあふれ
に雅とも言ふ浪の聲の其進ひとに茶事は之喩
つてはまた釜のその湯沸く火勢風筆にさひて釜
中にて沸騰する村雲のやまとにいふあることのごとし
此釜中の水更に増しあるにあらず文風火の象衡
上るもの故にて沸り騰るなり故にその蓋をひらきて

茶の湯[illegible]の時のみ湯は出でつまりて沸あふるのみ
しかるのみならず此字豆浪は風筆の數きと上ふふ
數をてうつるく沸上る勢ひ勅のときる[illegible]
又畢に茶道ひて澄るてほとふに衡上る風筆水
波に透りて空に發せる火理に入波は文はとにの如
く平にして收るの茶[illegible]其勢全く釜湯に同じ此所に
生む豆湯にもよわ事い火にやこのれぬいふ
甚しと[illegible]筆すわれ
に茶湯の條文を記すのれし茶きつや薪とる
らん此迷是數茶の神

始うらよ天と俗く異の所植と大きつよ翔らふた
この時義世嵐よ進ミ海ミたる富よき保もてく
胥も身ル碑ハ九たけ省ミいもてしと言あく劒
古刀ときしいル紙水の泡ときえ新く澳津なみ
うる清よ古のれ来て見るよひ毎ハく海人の
新玉の年の世ふル人よハるかな年
契ふ色心世ミのしはいミ海紙よハふ新
おろ男ときわミ
海ミ

風をあハ子ともル新九家ハ海ミ光
志ふと古の人ハいひ事理竹馬よ歌ろ光歌
しろなる子ル男ときわろ新殿造ろ媛なひを
し目利ら黒髪ゆけつら玉河里ミもあら乱な
里ふし世の中ハミろル志ら歌ハ事ミ世や
待ら人ハれル吾ハやミふら玉ミもつる益
ル建雄ミろら清く捨しうき世ハ村雀子ハミふ
形の長所のおル比横ミて波ミる新武
憶念の力弱くて新学ひ比ろこと世ハいと極ハ
里しハいつて人よ世ミらしとんを薄きしル昔
ミちる世ハハ河ル日ハ世れて玉ハ新ふこルと

ちかきる本性まつわ合ひて世の中珍まれ大あ堂々ほ飼れきてにつわかく飼るおとふ小きのふほうかれなふ忘れ鶏の事ハ夕よわ飼るさることのち小円し物欲食へとも目に平穏しく放ちし事より開とも何かも飼る鶏ハ地誌出る周利え事ともかくや其人好きハ中る事のこれやまくそ

鶏能く飼ゆきくえる鶏類ハ同し色とせ

飼の識さわ乃事

ハときれときせ五まし種子とあしかくまし

世話もひ出るまへふかいつくまハ好とし　と登年なま事
假まし人のかくろし言ふも飼されこめつらし漢ともらはくるかの或人の語りしハ此あらりよ家と来る人の何とかやふ山家よ鶏り寂かまつて有ぬ其よ其の高よ嵌く鶴の出色の外で卵る人あまし卵あまれよ家鴨の卵と取ふ人置ふわかの母とまあきわともむらておろむおせいてめく生れ出る小家鴨まで其も雛く雌雄とも小いるく離すて暖るかまり飼しかくてめきとも小円愛でともはく飛行して志きし飼りて其友たなる庵

一いと多く伴ひ来る故に社寺の部に
てなくるものとのみ思ひなんかりかくるおとこ雖然
無学とは決めん一四方歳の觸れ一四方治の隔
りてなんの死けるを度世間にも家衰へていとわ
びしくなむあり果ばると侍る和漢の書籍の
ふるものの多くなれとかくる例いまことに未曾
有の奇特なりわれ世もくの儒の道を学ひ仏の
門に入る或は倭魂をいひ漢の部類いと
多くある中に恥なしり身を捨るものいくそくく
の行る武門の道義なりてなる故しまと

世に人元をわれ言分きる屋まるものなるを知らるるに
もかくるものの程に世世のあるを褒稱ふる世の一人
社上をいふ道行る羽林ましてうまく例いまる雖
しかも世のうまをめしまてなる欲学ま或歌曾
ふ世間り世元ま袖をしほ里しを世間りて
思ふまあるる義をの世ま稱なるなのしなる
をいるをつらまを打なんるをいを口説しとをつをを
道理なまをいうて世所を稱をたくを事間
つるをを小祢して世ま学くを名を聞をしを浮の世
をつるを接続なんまを学を此雖雄の屋稱のを

なら風ぞる人皆人の中にまけなんと思ふ情夫も起
ふり起さ群衆ともなるべきまゐりそこに居る学
名高く皆そなんはたまたまいつらのなる名所
となる屋く園主のたゆんよもいとを知功徳ふし
てをしく栄を立か繁らん因ともなるべき知なる梨を
もそも賤し兼ねをそ貴を解ふを郷大ゆるめ
智なるをけしもめてをあるを鶴ちを代集ひてゆ
ふをも当ら恩家鴨のをとりのべあるゆ一時
の戯とれはゆ屋自ら福分を棄影因縁なりゆ群
あら喜ゆ碑をあてを猶解らゆ田豆をゆなをとて白

衣観世音菩薩を安置して毎福をいのらはを
無憑自他平等の方便品を一なとゆ
つくるものら徒らゆ屋業をいとゆ
やうゆ

人としてをもをこのゆらを大聖のを
言のうへなる鴨を世の人ゆ代とをのく美の国豆
ゆをを第ををゆいつのををゆ田びをとをを
鴨の数をもあらはれをゆ業あるをとりかを
ゆををとゆ恨をあへゆ須ゆ極楽をををを美国
豆に日本現龍なを業を建雄も及尚業を

けさを名ハ久方とハ天まもまこと現身の世ゝ無
ひゝまこと多世ハ千代流りゝ逃いゝくもあこと南も
ちをふ屋家影を世ゝ　墨田屋の名ハ南無
ふかゝめ法の玉ふ神　義烈功高ゝ世ゝ　[illegible]
拙きゝいゝのゝ毛毛野然ハあまこと今まゝ上見を外
発ハ知ゝ孫ゝ人ありとも竹ゝね蔭拙をゝ
ゝゝゝゝゝゝ

孤雲雲ゝ物なゝ里彼所の墨田ゝ多
しといゝ有ゝ金剛とゝふ修
験者の道の雲ゝ孤のいね南わゝ蔭ゝ

いゝ逃くゝゝゝゝ逃去ぬゝ日無山伏ゝものゝわ
金ゝ自ゝ用ゝ修験のゝ孤ふ集りゝほと
ふゝ屋の井戸ゝわゝふ孤ゝわ田ゝふ
と高ゝひゝ見ゝ苦ゝゝ光ゝ
くゝゝわゝ年ゝの金墨ゝ化ゝ出ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝの山ゝ国ゝ毛ゝゝ神ゝ
ハ国ゝ毛ゝゝゝ神ゝ
ゝゝ金剛ゝゝ東稲ゝ高ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

なりいたるまでの事ありの事ありて歌をよみ
歌をよみて打まきまはるる印結ひ初里の人と
ありて狐とも狐ともならず歌をよまれ
ならずとも狐みまはらすやといふに何の狐ならん
人狐の咎ありてめくるとしてかの
化ものなれとそれいなるものとしてきるる名歌
一報なる果里と互に時もわすれ金
剛の力も陸の力業まで打擲もたる報ゆるを
てきるもの如こ狐なと殊にのこ及間の
一果高中時高とて

狼毛ひとふるはまは毛はなわとて唐國あい獣
ふこと多ふこと多めり文海授沙云禽獸中為人口
實者多矣然皆美悪相半即狗彘亦然惟狼最多而
皆非美称言殘忍曰豺狼曰虎狼聲不美曰狼聲毒
曰狼毒有文相曰狼顧無義曰中山狼恣食曰狼食
無厭曰狼貪製肘曰狼跋奔走曰狼竄不撿曰狼藉
又曰狼戾失次曰狼狽疾曰狼疾邊警曰狼烟挑鬪
曰狼子野心賊星曰天狼丘墓精曰狼鬼察賊蟲曰
狼筋といへることく一くさも美名ハなくまるる
皇國ふて是をこの惡めるる狗をなくて書紀まも海

可畏神なりといひて其神を称へいのる恐
のる名をかへられて人のこのりいふを聞て作り
人ををくきて辨るあやしやゆとこのやいふ山田
猟人をかるとて猟のふうこあるを式をさのを
今志をしかりかりをは清さをよもあてんと
契を置てけて日は面を彼方よりゆ来をやへを
む来りけら蛭を来をを抱きとりてこの子
式母猟を契を遠に行をりてをしとなんを
結縁なと嘯伏をしふよりてを皮をを剥をよ
けらを剥て去るを無くをとい原無猟ひを僧

守るを剥とりてを肉を煙を打うけて無ふ煙
家いをを物ををのと猟夫をかをのをとふし
て人年あたるものをかりをを病を村を人
知害ふをありなと結る年めをしく学をつを
を考ふるを法師とハを猟を式猟をるを
廊てを神とハをの猟ををたを原しや方生神
とハ獵器ふるをのハあらを意く雷をまをとりて
称へ湯をらん病をを人を害ふを知を狗嵐を
ものををのを岩たを狗嵐のををらんや人を又
志のなんを猟いを猟をれ狗嵐ふを岩を病れ

こらぬ時無きを人に病ませまほしき
物やうなり
　　早稲の苗神無き神の性なれば人草と
　　思ふ事なり
恩親一如自他平等なるらい刀割香塗仏差別の
あら井方物をよくもんを反照して見をいと
いとやすし家多の物あ反の夕軒よ蜘の巣をの
くるを見て彼よかをわて面りふれよ物もひて
けをを見くくしくれとうんはく
　　産業より水をもを漁を猟仕業を
夕方くく日暮て軒に夕月夜陰くく軒よ出る
蜘蛛の孫生れ糸のいとを巣をかく掛を結ひを八重
垣の新巣を作り網ら引くい物ら来れを獲物
まつ捕れ試いを枝とりて破ら取を巣を
物蜘蛛獲仲間を告らく結ばへやよまを物を一収
ふれ一言申を取れの生ら数ふを物ら取れ
来れを人の為来人の為ふを又ひを取の業の
ら出や昔奴の業祖池の物は業ふを物を業を水を
波を一船を出を出て告るを網ひを網
波ひを物を出を業を産業を網ひ張を取を

無らんとしまこと仆条式かけりまく畏このれとも先
自主光かもやく姫神の宮仆し社神よ行雷の
驗法を為掘墓若雲井こ言ふく関を命のう
祝い咎をく嬰あ理何試ふくとおもわとと
ちれい殺しのつ毎同一数ひのおとわとを
を無しといふ人畏れを出ととの時をいを毛
物も皆ちのあ命ひるの先をかまく一月もの
ろ魚よやかれる人の仆ちよ海川野山れ
ちくく学ちひの仆雷ちをひ出る物とをらな
物もあく人とはとよ間ちらくほち試挑を名

を競ひ差ひのらをふ毛物なを相食むちのれ
をしやや差ちのを更とし毎仆のれまふ人を
らも然ひるものを形のつよ植木の隈ふ巣をく
見ををのをよ物をとるとをを何をのわをる咎
をらんをのをとれも人の出をひかふ走星西
ふ質よひををるあら差ひ自ら縁りをる物を泊
ることは天津仆神の編ひをく恩顧と仆くを
星物皆受る性ひをい出をく雷のまり幽さの
毎ちら嬰何ようあら神奴の申言を獣嘗
諾ひのをひを宮物出来む月ふとさね咄咲

春の暮卯月のはじめ残る花もなく名残の
是を堅魚島とぞ云ふ然るに彼処ハ海中にして
漁戸多くの船を出て一葉の間地にさ里松魚を見て
幸ひ舟に乗りて釣るとその鳴り釣る頃をも好み
魚子つり釣るに都て其のするをと云ふ契りまさを
ハ合法なる事る文村里まて聞く麦をのわるとぞ云ふ
とるに流る麦秋則にして漁る事其数々の吉針
針と云われハなわとて呼ぶ事るとハ和歌の
秘訣なる事考ふる人あらはその合法なりとい
ふ其の暮に帰り出て其数々人家を婦女に似て

是をあらむ河なれめて他にも寄せの数へ多くの舟の
上よりて是を上等にして不数まへられ村里にて毎
本門に松遊なきを言ふも海人戸々ありては
海辛に験をあらはしそも漁舗近くよもあれて
鰹釣其の毎八十に釣舟漕ぎ出て来たりしに
是ての河を尋ねなく
相州よりなるに至り河を深本郷には河へ
り北にその先に百余千里に渓流に向かふ子
本郷とハいふて渓からもかくて呼ぶに於いて
く我国えて是ハなかり近く来て毎年不北

名をしるして何らの奴名を呼むとて惜くさ
とそをくの事をいつつ淡本郷ちなと四人
ふきをあいさらしを備あもと社あまをいそ
口をしよ限まらしやいそやいそまとの名ふをへ
ふしと去をくくまを流しを能登の塩の
伊勢より三角捐の所の人をを名を去を出
て見つまといふとつて味二こしを能野を行
をて古つより名を杉ふ物なるをあれをこを
あらぬ名ほををを敷をを稚苗ほるを人の水
をりくいををつ兼ふをん有度ふ淡本

綿ほの河をしを家の堀を淡百合をを入下
男い淡甘をほくいふるひをふををもを
い家ふをををを高をの地をほりて笑ひる
ををしをををを樂ふをりて呼ふをあれ合法
ふはを引うつて以をを口を家島帽ふ親を
淡ゆふを花をくを家を数をを風ふす
嘉ふくを名を家ふれ
淡ふ家ふををふ河村田屋より南部ゆくをとを
をふ以つつけるを見て
う鑑淡く以ゆ味茶三を屋の祇を以解

とけくやくよりそれうつ流るるもとそのあるこ
て海る時の乃西きふりなり
四時うつり変る折くよ庭の砌なるる
を多のあ元日の朝にた若水を汲まを水近
き井ひくを曙と杉をとめて鼓音出杉を
水杉とい弟一を天をうて海を口をうて洗ひ厨
きと雑煮祝の膳を雑煮を煮をとり
て薪口を焚くを楪といてり
四月朱雀門継の祝を云をる何とこの古弟
まを焼をめて屠蘇を飲をなり

大内をあるもこの内にあるもあるあるあ門杉をこの多く
四月はを地仏也僧侶の出こるるもあるもいなり
といふ国を考ふるを門杉をいの雲をを
南うしものの古を行を初春の花也杉を杉
を植を民部戸とあるを代ををうを之仏堂寺八道角
こ藤花山昌ね杉をあふをを春のをうを
杉雲をを侍ける小侍
わをくひもををを侍とをを門杉
きををたるを注連縄をこの中ひもを
の出入を高をくをりを祝を

柱にのこりあら井鬼木といふ物をいつよりあつる
事にたへてハもはらくらのまわれのはる常なる
なりといふ郷里にハ薪をつミて是を福木と
いふといへり柳その鬼木といふもの門松のを
世のうらを割て横に引置して門柱にたて
おくふとこれハ厭勝の方にかきと抄もあるて
を今考ふるに古きに薪の名付なるそこの村里
の福木無き古風の残れるそのなり也 鬼木といふ大
庭木なる数あつし むかしハ其の中より付けたる門の
内外に薪をつミまるなりん面々の郷に昔
ありしふ庭木にうちこれ宗教をし人るこれしをかさかと似
然とし此ら経家の行為のも是皆のわ翔半錦なし
て何とも志れもなめをしれ稀なる門横に引
黒くしてよる木横重宿なる形なるへし十五日
よるいふひとそて童部の松まてつくもし数
杖とく女の出来れハ老業る幼蔵をいそ代打
の童親あらく集れハ遣る無き女を門ぞうち出るその
なしと叫ひつるを古き鞭杖よもいふかるよ俗なれ
秋蔘錢よ十五日ころなとかのもくまかなれ
かもの末ひよ亦くしく出れこる給 女房なる

[illegible]

荷花蘭麝の名をもてはやし
[illegible]
いひつたふるの業は恒樣に似れいなるべん
相すてはこれとなく時をもてあそ
紙の色の彩よりかひもてあそぶのねともかした
ふのつくいひいもなるわ

水無月廿第日ときえの名れ里鶏宮と
て熊野十二社まわるの別菊港塚の源平
面家いつまのかるよ浜いもとらかるる赤肉
の鶏子合をもるもたるまの猪角れい源氏子

屬してもとより左右の里閭數多といふとい
ひ里は港湾の商家多くあり船とそなへ
能登屋のものとは別なれども同じ郷
の眞言僧とこのそなへいとおとへ
るやとふ聚落の總社なりとは云ふい
と賑ひ壇尻町より出て引續き長谷人
形を作る五軒幕の内三線を數なとす
るやしやく此歩むで里程ありて門前とを
神部とて多く居る神の面のなりたふ
古代形より作らるものこの面なる

ハ何時ごろ造出したるものなるか
はしらず此處の人民の信仰の
ふるさとなりしかはしらず
ふるさとなる事なるを壇尻と改名
たるものあらしかを有むとの名
をふるやはらむあるいふ岩船のれまたし
くなるものあらんかのうるはしくなる
稱ひまいふ形よりこの家の
しるのこるまで古代
えすなんある関よりて
家なりと德をくむるを

名ならぬ所とれもひやかしをはやすへのゑひし
しとはり東国まてハたえし皇おとりといひてハく
とはいへと文志ゆる世このし尾張国の甚尾伊勢国
世いつるをのゝふありきゝハ氷く武くしく
あふりまて勢はりしを参河をめくまるを噺
納ありとて津島祭のふの幕のあよいつまゝか
の字こゝ来無て伊勢國の祭見よむ出てる代討
世わりれハ臺尾おありと囃しものとひ倣
ふきるゆて無き倣なれハ其業し祠の東の西
ふて始らひたやしあるをは代の業とし
何する事てくかうつりしやとかゝくわし こと寄ふ
に猿いとゆつらしくおゐをしをとて思ひ出ゐるを
つまゝて文よ序るふ乃えしまち今まく囃子詞
まてを臺ハ人形あらは人形臺なゐ踊ある
踊乃れ太鼓あらハ太鼓臺よて出えしまなら
ねとゐつく米てあ無く倣なまハあつく臺あり
とハ呼ま物る事つし
臺あり迄てやもや業をれ不作えくうち治
寄る伊代ふふ為て
祭ふつまて又きけるわ郷（アサコ）とのやゝふもと

此まつりは長月の頃也扨もそこら里人集
めて御供なとおもくいを振さしとなもそ老
てさはうらめきたるものゝかゝるやうに此日ら
を業とする鄙ひるきと人のゝくをもかねて
はものゝ行きに人知つる事多このわ為とへ
わひしわの老人これうの舞の為よりもまの扨
うまを代の金を舞とうもをあとて扨置ら
いるもを更やく舞ハ特人ふゝ山よゆ寿命し
うハ山物ねゝ行ねゝ行よるるものゝくやく
を金をるる扨しまゝ扨奪ひやらんと

いるる扨ゝられゝと去よふおとよおひて老人を
きまこうして天の縄すものふと脱ひゝくゝ名
とに猶紛ハ特を逐ひて殘悔ゝ給放いゝ
ゝよは隠あてひゝくゝ扨ものよあるかの
時おそし此時ゝやひゝきとゝ働ゝ行き
をおきるふゝ扨いるを老人ゝゝ
しつ金をはるゝ時ゝ扨ハ筒の者幔屋
ふひゝくゝ更ゝ働きすつゝ立をれも幔屋より
怎人ゝと思ひやうなゝと働しやゝいゝ更働
ゝしゝふしとゝいつら殘悔を守しやゝ

へ無者ハきて無れとも玉ゐれよ當らぬあらねば
無たふるへまゝなりとひくいとさらぬの
ほりわ怎人きんてはえ無にふゝわ呂ゝわ必
来てゝとゝ呂ゝ呂ゝ行傳ゝゝ可ゝゝ大ゝゝ
きやゝゝ此事ゝて社ゆひしこの俣ゝてはむの
のゝやゝ字稼ゝいとゝ花やゝの形ゝ年月ゝ稼ゝ
て難波のゝけゝ年ゝ九ゝゝりゝ
とゝゝ教けゝゝいめゝて逆来といひくやゝ
ぬ程者ゝゝゝてあゝゝのゝなゝゝ形ゝ難波
ゝけゝゝや

富田といふ変化ふゝ程ゝつらのふをこの事
百十四箇ゝのわ此村里のゝゝゝゝ七村を
分ゝゝ二組とゝゝ七の市の一むら来ゝゝの
ゝゝゝ変の別曲ゝゝ毛自新ゝゝいゝ陳ゝ仮
屋ゝゝゝゝゝ里人日毎ゝつゝひゝゝゝ此ゝ取
ひゝゝゝゝ仮まれ酒
喰ふ多の別ゝは別曲の一村人ハ老ゝ幼ゝ
の此大富屋ゝ来ハつゝひゝを
ゝ来る酒ゝ元酒ゝ掘ゝ此新ゝ調し
出ゝゝゝゝ別ゝ無ゝて方ゝ二組の

里人多く集り庭にて二つ三つ手に打合ふ音より
てうむらまにもくは門再ひ又再ひ打合ふ
是なん精進ひ祭とよふ祭をぞ始れハやゝの程に
擬泥なり如何なれの調度なる市なしくる里
まらふとに云ひて如何阪庖なさらも何それの
調度を賣新に物を乞ふよわ売買容易からぬ
分里人困窮なる事凡なまやとわふよ村〳〵
不實用として江戸代ありしのたちいつら数拾石に
餘まる趣すて此料とは少い舟らなれい
く心まくきてと那ま風俗などのらそなまさふ

るひとまつらしく覚ゆる寒さは満ちたる
祭のさまなり盂蘭盆のつとひとしき事なりや
百八松明とて門に松を百八ならべてたく家ひ
祀るものかくも凡書に見えたれい以ふに是ふかい
まさなくよりりて咽ふそよあるとつよふ時る
煩悩の消滅せしまさ松に燭をともしあめ
燈籠をも営みしものも満ち内もおひさしとし
といへわさて十四日とわかさまくのまめて出
く條六齋とて因縁物語に和讃のやうにかなる
る笑に男もさわ四まわうちなす遅く起きるな

らしてかゝる法者昔学生寺書わ六齋念佛の
世風なるゝ又わ毛の無聖比丘尼と
て地獄変わの繪とまなとまてるゝの玉わ
いふゝ法学郷の名所にもゆらしの美男ハ
似象的尼なとむ出れ衣着る学者
とまゝ物もむいとゝ物もゝくもこのから
学者と思ゝるゝ色俗のハ癖也こゝは学ゝわ
いやふ法さ学を浄瑠璃小説なと高歌
あ象て出ゝ結まあゝくいと気のは町の家
ゝふ法学郷を居ゝわまゝ俗ゝゝひくれハ

ふふといふさゝ者とゝまの学ゝ男ハ著家
ゝゝ或ゝ鉢垂のびくなと年なゝゝ町ゝを出
くらゝふふやゝまゝ板ゝ出のらいとふきハ
く魂祭のやゝゝ迎あらもゝ門ゆる魂迎ゝ巫
ゝわ物ゝ迎ふ寺ゝ者ゝ迎ゝるゝの多くゝ巫の
寺ハ出ゝあへね寺文月とまれハいゝ出ゝくむの
ハおくゝゝとゝふゝこのむうへおくゝのゝらべ
ちゝ棚なと設け霊供なと出るゝゝあらし
あゝ気らの服なゝ家ゝなゝと云寺ゝてゝ
ふゝゝ色去の精魂地獄ふゝゝ盆あら学ハいとう

まゝうらの好美美所にまゝけあらむとおもへ
盆に一月者むくつけりのるへに成すあるに招よら
さられて持佛堂に行偶まこのうすわ我らん無い
のふわひしうらむとわゝあつまる浦安つよは植松
とて高まさしらを堂てゝ蓮を結ひ松の葉
をと寄うをけて漁戸の美人らかよ大をつけく
投場ふ程高のうれひ多くを美つはひとに投い
わるのえあるに成れて期とに出海まて死し
高る去に遍福をめとおそらかとふ名をを
うしかく

美海よくゝ
波のしら波

因云うらわるのさとは雲棲の正訛集ふ世人以
七月十五施鬼神食為于蘭盆大齋之會此訛也蘭
盆縁起目連謂七月十五衆僧解夏自恣九旬參學
多得道者此日備供其福百倍非施鬼神食也施食
自縁起阿難不限七月十五所用之器是摩竭國斛
亦非蘭盆蓋一則上奉聖賢一則下濟餓鬼悲敬異
由恩可等混云云古く祀り事をなる巫女
いとゝ愛をの小を形うる古愛をなを以と多うる中

ふ此あるゝ者は殊に信ずるもの多しとせん也
雲樓の直道錄ふいつるゝあるを内經以信巫不信
醫列於五不治而杭人尚巫鄉村為尤甚凡有疾也
或求籤或灼龜或問筮或占易課或打水椀必諂審
有禍崇否彼師巫隨其胸臆或曰犯其神或曰衝某
鬼或曰先亡親屬求食或曰帶血陰入作殃病者思
之稍涉疑似即便信受一依所命而設祭禱藥師經
言宰殺衆生呼諸魍魎請乞福祐病者無益殺業具
存偶爾病痊其惑愈固乃至產育痘疹與鬼何異亦
復信之云云いとまなり豪富の巫

いとふるゝ世に用ひられて頗る富饒なるものゝ如
さ是神を祭なと事〳〵しき為めるいまへの
神懸なとの餘波なるべきとひを形容いるゝ
似ようとひゐりとも云るものに豪なる者
語るに曰く此大臣等の夜首をきわとりてい
みしものゝ如きるを無こゝの大臣首がさゝを活と
ゝるものゝ如きるを俗を仕事なりと云事
人うらなきなら無物なるを用ふゝふこと
を分活ふゝ巫とはとを解るゝ種中は夜又吉
蒼人喜慶乃起戸鬼なるを大の事相解ゝを用な

なるものなら毋畢竟附木俵子に関神四鬼
の雲霧なるものなる鬱鬱たる所作なる
るべし大こうを作るなるのを藤芳ありをいふ
なる所作拙なる能作の鬼なるあるべき所作の逆さ平
るものあらまるべし云精なる意味神を
祭るなる神に飯を祭り汁鱠なる組して
祭るなんを粽くいふものあり邯里を
七年こうひ祭るなり去る二月夏六月冬
十月なる鬼の飯子供をるる宮あり春を春
なるから四の上に作べく朝まつり夏に米粽の
上に置く置まはなる合ひ屋敷の庭まれつる多
に固るといふ然い〳〵と村里なるさる風俗
なるからなるべし嘉友なる云精いと移らし
歩くんをらひといふとこれ若山あるをる
は長崎唐に一年のうと夏祭なる鬼の長き
縄きるを打合こうまをる紙しの呼へあるを
所をなる志なるの妨ありを神なる
せんをんをらひなりと以へ長大こうを同さを
をとおはつりし式をいに長崎にお祭られ
元禄をこうふ家毎年為といふ物をうを挿ふ

ことハなりたく豆ふ汁を煮て親しまるものを
をしへてあるしるとかゝ者ゝ条こゝ味をかゝとゝ掛
とゝふ名の門ゆるゝとゝ考ふ者ゝ事なん
きるゝとハ者ゝ物をかゝあんと無ゝ此ゝ懺法
なるゝ掛ひとゝは減除ゝ義ゝ里商人ハ取
利を事ふ業ゝるゝ有ゝ事ゝ懺悔ゝ
佛ゝを為ゝふあらむゝ親しまとゝ打
をゝて佛名ゝを唱ふとあらさるゝかゝら
ゝ豆腐汁を調ゝとゝふゝ世名ゝ為ゝ
しゝて長服をゝは言ゝ国ゝ売ゝ買ゝ物ゝ価

宮下げて賣掛ふ者ゝ心ゝ懺法のゝ事ゝ
きるゝ者ゝいゝこの本をわゝて長崎ゝ者ゝ
ゝるゝやゝなゝあゝ者ゝ面ゝの風俗をゝは
自らいよゝのゝまゝ者ゝられゝん者ゝ
ゝれゝ者ゝて者ゝの思ゝるゝ者ゝ
家をゝのゝまゝ言ゝて又言ゝ
ゝゝえゝ者ゝ家宿ゝれハ者ゝ
かけ者ゝく掛ひゝやゝ者ゝ者ゝの家
ゝ者ゝる風のゝく
言ゝひゝよゝ者ゝ

小机よりもとり頼杖つくとあるの字見ひて
ろふもられなり
堤の初よ梅はさらるる字見て
このもり集てむすびて結ぶる梅のこゝろ袖を
つゝよ赤やかもとれ
人の花をもりてくちるまをそれを
思ひ出の多うるまをなれてもれ衰をのけ
よわれ君むすしは
花はてゝあまて憂る中と俤花宮集
しるとらぬ君まるれ志面よ世弥よ

色なくて花のこゝろの中
月前落花
ゝよ色あら俤浮の春の月なのむる袖よ
夢もたり春ゝ
山落花
やるまるなのこゝろなあり春ゝ色ちるもちら
ぬを風のまふく
落花
雲よりも浮まゝの色をてちるもちらは
光なるらあ

まこと
世の水の泡ともきえてく柳よりこぼるる花や春
分るるらん姿
雨後落花
ちりしいらぬ間に花の盛りの酒のみ出むまま
柳ちる道のちるらん姿
春の暮
藤の花いまのふの花の盛りなる末の柳となり
てちるらんなみより
結柳
本の枝のつくなる柳の間に柳より春
柳むすびてまつ引
五月雨の比
さくれの彩帯と落る柳より春そのを
ふるはるる
若竹を見て
まちかねの彩帯あやし竹のふし親しぼん
小ちいる竹をしく
閑居
思ひ絶ぬ間つ袖まつ雨いとゆる春なりあ

し捨てのそれ

扇

この夏をおもふ心の景の春こそもと関の扇の陰

ねこのまし　この八

蟲

わすれてい春のとこのり松むしの春よひこのれ

てるも妙ふ元の秋

秋夕

夕されい淡の色さむく吹ふして尾花の袖

しめる波の音

月の影海まこを見人るる中ふ

杉をひまもやそそ杉ふ海ふ沙の秋ふ岩袖ふ

高ふて月を見人とふ

秋のこのる影りそ月ふうるふれ秋春月

のふれる袖の

月ふれ無を人を意ふまを人岩岡田ひこ秋

第や見ふふ秋

ふふ清く杉ふひ出月の侍ふ四ふこの春ふ

けふそ秋ふふ春

秋の野ふ北中ふ

[illegible]

[illegible]の面影ハ[illegible]の落ふ
[illegible]の夕暮
[illegible]渡る松の葉[illegible]松[illegible]ひとつ死秋
のゆふくれ

九月廿[illegible]

[illegible]の[illegible]とさ[illegible]めぬ秋の[illegible]の[illegible]ら[illegible]
[illegible]ちの[illegible]

時雨

大[illegible]さ[illegible]来なる[illegible]ら[illegible]
[illegible]れ[illegible]

寒草

[illegible]の[illegible]ふ[illegible]ら[illegible]根[illegible]の
[illegible]の[illegible]の下草
[illegible]

[illegible]の[illegible]の何[illegible]の果
のあらふ[illegible]好

枯野嵐

[illegible]千種[illegible]の[illegible]
[illegible]ひ[illegible]

寒草

歳りあひてあらそふこと一ぢの業に家をあらそふなり

その歌

鶯聲をしぼる山ぶしのこのひとこゑや称ちんきよ歌みて

実に業ふ

業をしりとふあきけるものをしいやきき

のるこゑちそをれ

なのれ

なのれ

家をはなとこそあらそ

家をはなとこそあらそふの云こそあるまなしてその習

なれ彼ふくあふてれのの言出るおのの理ふ

ひとうれはさるをいそひまふる事をひ

る猫張とふうくいふ人の猫をるをそ

ふ牡猫とふ牡傷人おふ牡ありといふ

五よ事ひをはひよそをかしーを事ふ牡ふ

家ををいこのをてをあらそふやといふ事傷人

とまれうくはれふ牡なりといひをを人ふ人に

なりあるるををしをしをあをのいふ傷の出また

るをりといふはをを事ふはけをれををおの習

なをふしをはら奴風彼なあ

世世のひくこと[illegible]
[illegible]社[illegible]
此[illegible]
く[illegible]
日光[illegible]五社[illegible]
[illegible]
及[illegible]
五社[illegible]
や日光[illegible]社山[illegible]
[illegible]

[illegible]念一[illegible]
[illegible]方[illegible]見廻り[illegible]江戸[illegible]
[illegible]
そ[illegible]周防の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

江戸に井戸多く出でたるなりけれども春面伏つ屋に振舞なる家毛氏なる家にて酒宴式亭代の場合と稱ひし鍋食後時はいつの頃なるか詳感狀を鍋いたらむまま鍋ふ毛ふ毛ふ毛なの事なる時毛いたら奴とたるの所と例れ有るなるわ地江戸と雲つ毛毛くといふ洲の筆北觀を書いと述て毛俗張まは変あり毛あるわ地ものわし

とい毛毛ふる前は毛ら出と呼ふ毛まるあ地しくなり思山毛無いの毛ふ毛ら神ないの

に毛ら上毛無いの毛ふ毛ら毛くと

いふ毛は何変毛毛と呼ふ何其毛毛下

毛ふ一と毛いは毛ふ形毛通ひひは町

ふふ毛り中毛と毛ふ程毛り毛毛ふ長崎毛

毛毛といふ毛人毛紅毛人毛といふ毛毛

いふ毛例れ毛ら毛毛毛毛置毛毛張毛

毛名毛毛毛変張し毛毛聚毛毛多毛毛毛

わ毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

毛毛張ひ毛何其毛振踊毛毛毛毛毛

無名所無跡毛ら毛毛毛毛毛毛毛毛

夜行百鬼の部類よりは花子は必ず将三合高陽の
原等旅路なれば京無之と求て多く賑一筆毒多
ていはば是を半紙百筆の多くて百筆くく
さらんといひ物の比叡の里一か京なとは稀牛
の馬蛇の多あるこ者を計無如此
とこの比なる色いとよ一なる筆となれと思出
るまに筆ふまの一条北山里なら稀とこの
部類比多あ稀よく拙者此等
よはあらしたる杉北杉れの部色なるあ世
とて殊更ふさるこうしを笑さんとあと

如あるも
如月比こそ雪あり是者高く嘯こそ
侵ふこ者ふ部比杉とこ
つらふ色あ陶こ者き侍あとふいふ更
部公はまこの比雪こそ河陶こ嘯侍れといへ
打ひて雪こそは出こ更ふ親の部比二の
こうこ者侍れて出事里比此あ者あ
いこ来つらのなる雪ふ侍あとふいふる僻毋
あ部比日こなるら減平ふんさ杉あ
陶と人の来りしうは侍こそ時島いとふ堂

ゆふべうちにかへり道にハほとゝぎすの鳴声
といふ人の家ゝのうちをうかゞひ見れバ里
めづらしきものゝしれなき奴
若い者のわるさならひのうつしまする母にハ
いとるゝもつゝ蓄なくなり
鼠の夜ごとに出るのを患ならぬといふ物ハなき
屋戸をなんおさめぬれバそれより菓子などを狙ひ
るにや、かゝる駟顔にて経などを読める机の上に
住ひなる此あたりのしなものをもちいハ油など吸ひて燈
を消しなどするにいと人ゝ惑ひて打殺しなどいへ

鬢出たる事ありて家の内を焼べき人〈割注〉
ほかハ取るべくもあらしといひて木のもえし試
此の人どもの評を得ていつもの如く者なりし奴の
くてほどいひある板枕の西うらかけておけバ
言に誉うすそこれハ鼠なりとて通へ逃へ
りなば書ひ成る旨をふ文ありてかはるまいに
と経し枕をもたりけれバ何を求めにか
ハ喰物のある所にハあらず枕近くきて咬るゝ
名あらハこのなるらえならぬと我にておもふ五
雑組ニ古書謂狼恭鼠拱主大吉とぞ云ふ時

一名六將早朝穿靴已陷一足有鼠人立而拱再三
叱之不退公怒取一靴投之中有巨虫尺餘隱為鼠
即不見以至可憎之物而亦能為人防患者此可怪
也とあり一とせ狐狸とおぼしき物ありて
ものと食をうけられいと大きなる蜈蚣のか
くまり居たりあるいは則とくに搖いとをのこの面
をうちうちとおもひあるふりして後ろ者なく
わが偶然のうきなる事とおもひ又前の報しなるふ
らふ下劣の鼠ならん程恩をうる者と教なり
雀のまうしあてをあるをあるさわ者ちまむさま

ぶりと陶をなくくうるの事をあるこの教をて飯を一
箸ふくさて四五口の程を與へるふなれて行ま
とおもひあるを者をなくふて米を食ふるの
自らを狐喰むまをを身ものれらを食ら
喰ものはさらふ者いくまをるを四度
いつのもうもら舞かくまをるのをとふ弥生九時日
まやををむ大かをうを殺へ重めを日のをりを
名を出むを者ものをを試を夜の夢をかいと
奥の部屋をとへを寄北の間よりの者のたをるをへ
平雀のまをるを米をひそふやをなわしふ見

るを見るうるそ一筆少女とあるめて黒き衣より袖
を出れて彩ひみる彩しよ無こ声をのぬるそ
目わ九く涼一筆なわらより比のようひをい
ふ名をとへいせそとこ名ふまいとい一筆岩脇
といふいとは此の一字無こ名やはん世ひ
字程を一筆よりらんまいとうれ
なむといふうるわらふひとわ比れ八束
る是世ら来なわ来を拾をむとるを見そ
比せは雀のいふいつらにいるの物まりそ
ふといい一筆語ひの海そ世ひ一ふ暑し河

里を出字けらけ来れ里紙を重ねあらむ
けるそよくそれハ竹の陰防海と重ねる
世伝ふこのとらをんとおもまいつの竹あそら
ふひしを四よ筆りるあるれもとつ里へと
いふあるとなわといへ無ひとりをそ里
けるやら海ちぬ今もとつとよひのくる彩子
海ちらを来たりつけ竹まかより竹まとおのら
裏ま里をそのりいうは東無を拾海をそ
ふへるを付ふるあるそ

ねふるるら海一筆世の名をとへ無ちと

さてわきとこまたきまるの
樹の根をもとめ近くけるの根をもとめ
ちくしのひてまるを蔵をあれ
るを以樹のうれを鶴の巣を頭を友鶴
の巣をうばひ頭しく争ふを人此まる
ふ蔵まて巣をる程ふ物をわとをそ城を
程ふ鮒をりをの喰をあ巣をむと
して争ひ争わをて鮒を面の巣の屋
面をを井をわちて死やらしのかふと
あるをを井を助をといへ無拾ひ国水の

井ふふ争わをて争をを此面ふを水を碧
をを海まるふかの鮒出をを国鮒のある
とふにうを鶴の争ひをを田ひをとと
ををの命めををまをの面やいをを川へ面を
やをとふをを放ちやいをを此国縁よ
はをを深く悟る為をを生死の大事をの
し為限ひを業縁をの為ふを為を
ハ須臾を延るを叶をを剃髪ハ得る為能
をを相違の法為る為能
為を為を為を不必
為を為を為を為ふを為ふを取

おこ[illegible]ものなく[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]
村立[illegible]ものこ[illegible]ものは[illegible]金
わわしく[illegible]義貞[illegible]
[illegible]場[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

書都の[illegible]前に者海[illegible]

[illegible]

[illegible]

ふまゝと思ひしに小出あるわかてはさる物に食
いたといふなとおきはやといふにはかぶ九
のいもんまはといつわし出堂なし味ふ
らしてふもゝ物ふふとをなるものとよを
思いふ思ひ物雑時ふ物ふけゝ物鍵ルすす
きあ六位まくきと考わるこの鮮けまいはも
なまと間まるとつゝまくくゝ高とへ出時朝な
といかく集しゝいら幸き燈ふまなこのらを
ものけ乃里掃墨ぬまゝる燈夷わ白えゝ
いるのまる殿宮のまなゝ娘ゝるまとをわくゝは

いゝゝ吹なけかるゝ也集ることは物ふまを燈
味ふふ物きゝといふ押年めゝ情ふまは
られはけまゝら燈玉のやゝまわ
赤ゝらぬゝふまゝ年のまやら玉思ひふま
ゝゝみふまゝられたゝる
かゝるとさゝ書けむいと嗚呼のまりなれ
ゝまふまきひゝ九燈暴まり
那ふ北けまくまゝる時なわけ物ふあらく
ゝゝゝ塩きふくふゝゝるはゝ元堂ゝ物味り
られはいゝふといふまは浪あこのりゝひらるま

米をば味噌を山里へ送りたんぜ給り
とおもふ事に国々へ行るゝ事なれ
ども道殿参道殿御出ふ
なりとも御書院へ通殿参道殿御出ふ
なりとも祇候仕る事なれ仰ふく思ら
る事なれ共御出ひとらしてゆゑ参しかる
べからず御出ひとらの門前の
当なりる侍を見て参殿より鶴ヶ
字調進仕る事なれ仰られ是ハ即参ら
なりる小者道ゆゑ参ら事ハ月ら
際ひこうして知れうるときゆゑ

うひしくふひなりれ知れうるこの三
百文三段の様子を書き
御ふとも健ふいと知
ゆゑ殿参道殿かりこの
ゆゑ仰られる上臈しの
ゆゑ御書ふと仰
ゆゑ御出ふのとき書し
ゆゑ御出ふ誠にのゆゑ
ゆゑ御出ふと義間集ふ
ゆゑ御出ふ人数ふ

八郎殿とのゝ御いひなづけ妻ゝ
けゝとあるゝ御おぼゝけひとゝ事ゝ
飯ゝ御ゝ事ゝ
ゝ
ゝ

人多くあり宗鏡録撰次昔東國元曉義相二法師同来唐國尋師遇夜宿荒止於塚間元曉法師因渴思醒見一泓水掬飲甚美及至天明觀是死尸之汁心惡吐之豁然大悟乃曰我聞佛言三界唯心萬法唯識故知美惡在我實非水乎云云豈止飲食のみならんや若よく此意を了達せば三界何ぞ置碍のまらん哉

前まといへることく鰹を海中に投ぜられハ十の釣舟幸多こるの時夜ふけまで漁を業とし遂に釣舟つくれ是を浪の花と称し夏の夜

ふ迄うを見いを堪うた気遣ひ無量無量意ふ
つけて詠る歌
数しらず角ふ打ふ
やあるる沖の釣舟
餌を投げ入るるや障魚の大魚群
つるまふ舟寄るまて
夜どもとふ無鰯のふつをふ迄をめられを海
ちわを言く沖陸るを云ふ云ふ
て相とてつてといへ魚者とは海人釣ふ
ふらるるるふ云魚の者とるるい

ふるまひから始ら信ふ能まて魚鳥なる屠
餐とは鯛りて餅とて餅なまとかの大魚鯛の姿
を焼ふ片しうる間をなけまし八角にて
おくるまつるといい奏申とよ若よつくるかふ
て飛るる
かいるを蓋に打のまて紫北下るり学のうき
酒しふ肴ふ出のしたて
長寿を祭やうのうりて弱て奏やまされ
るふかうり
ぞに義ふ人に対を受るふ竹をとを長をあとをま

ふ百弧結付うり中を出をうしかけて平鯛を
いりく海殿ふ高の紙を切殿を書ふ表をて
巣鶴の遠入をりふ山ふ出るりあうけたと
以人形の型のうを作ん花ふして
ひうい海好殿のふ長をとならを巣ふの長
さのんとはおもしひのけきや
百千の数の中ふ高きひとつのうをのりて花
筒とうる因縁果報なへつこうなる
此あうり社ふよる陽ふ巣あうといい陽いを
足陽ふしくくをよ求るふいを高きるをり

[illegible]

[illegible]

[illegible]

家雲一面わ夜ふくるまゝ時はたゝ野の中にあるこゝろぢ心地する

まくらもわあらたかの中の野ゝ原也四方の雪の

家小家や高き所に行武

なとあふやうの野又こゝる堀川のそひなれ流れ

夕の夜も河風さむく映き月もそこの雪の高く

嶂こゝ海ゝら上あり

芦屋やこゝる夜半北川の岸辺に見こゝ彩

津ゝひゝふゝわなゝ也

まひくの寂寞をもふさゝふゝ彩ゝる

月ふゝ雪ふくゝ寒わ

家ゝ河ゝ風情ゝる屋ゝ浪の音

松ゝく風ゝ月ゝ見ゝ月ゝ見ゝ見ゝ

ゝ夜なゝ物ゝ海ゝ思ひ出ゝ

うかひきぬ須ゝ北者の秋の月ゝ同

神ゝ所ゝ

羅ゝくゝゝ月ゝ月ゝ月ゝ

の月ゝゝ

野ゝゝ武蔵夜梅ゝ音ゝ時ゝ

ゝゝ敵ゝ

ふ事ゝ寄ものを問ら給ふ人なと
はゝ程ゝ程ゝ寄る事ゝ有ゝ事ゝ昔ゝ夜ゝ
ゝ侍ふ

門程ゝ見れ共ゝ昔ゝ夜ゝ寄ゝ事ゝ
ゝまゝ家ゝの住ひ
なとゝ物ゝ程ゝ大ゝ強ゝ侍ゝ経ゝ禅觀ゝ
のゝ事ゝ有ゝ見ゝ自ゝ安ゝ人ゝ人ゝ
ゝはゝ問ゝ事ゝ問ゝ
修ゝ侍ゝ因ふ
ゝ事ゝ寄ゝ今ゝ門ゝ者ゝ見ゝ夜ゝ

ゝ生
大恵禅門の書状見ゝ
ゝ見ゝ人ゝ
ゝ志ゝ
唐籍ゝ
ゝ人ゝ
ゝ
ゝ

らの園もあやなく一面らの家を捨てくおのち
しくのふへいるとなるこの山里の理とわるひ
里の山の駒を報うちくたの山ち奥の
く寶の在所最稀んとをもひ石根
ふるたくゆけ常岩あの火登りあ
雲ふのうたりき武志引導する人ふ
遂ねる仮寝を重庵技ねのつら
くるゆ業くて大日の生神の哭ひ技きわ
里の大地のいねを膳を業骨を徹里わ
とわとを志ますひをえてなを竹の焼む色

撫子如星紀表下くら業林を寝を表
ルなを答ちたるもわ弥増ふ進めを道ふ
のつら家を くりて仰きるる世を乃と付
しを寝を桜引杉を咲ら花のありとくに
をるのをりくるを如を鶴業を用たおを
人嶽家袖をを捧れいを也稲たの八重山
けをゆくを社ほ里れをのらをを
やを其庵寝
ゆくををくをくをくをくをくを
くをを丸と表修り九年月を国をる

おもひ出ることのなかりけり

仰いまを蒙りて家よりあへることのなかりけり

文殊寺院といふ寺の住持そのわなかいてやへ

老衰へあるを見て長き年月をるなくるまして

今かく仰の御恵をそなへて再び帰るべきことを

思ふ所の果の恩頼よりて結ぶ日月とを

仰ぎ奉るるなる事仏をそなへ立出る者とて

拝ひさるといふ事を聞えしく別れ一人の

名残も惜しきならば

家を経て機なき衣をうるの立かへる

仰のきくへあらはは唯はちひとつ事

立出る者こゝ西とそけふ新年のわかれとお

もひつけて

生て間と物よりそのれ志こゝの志重

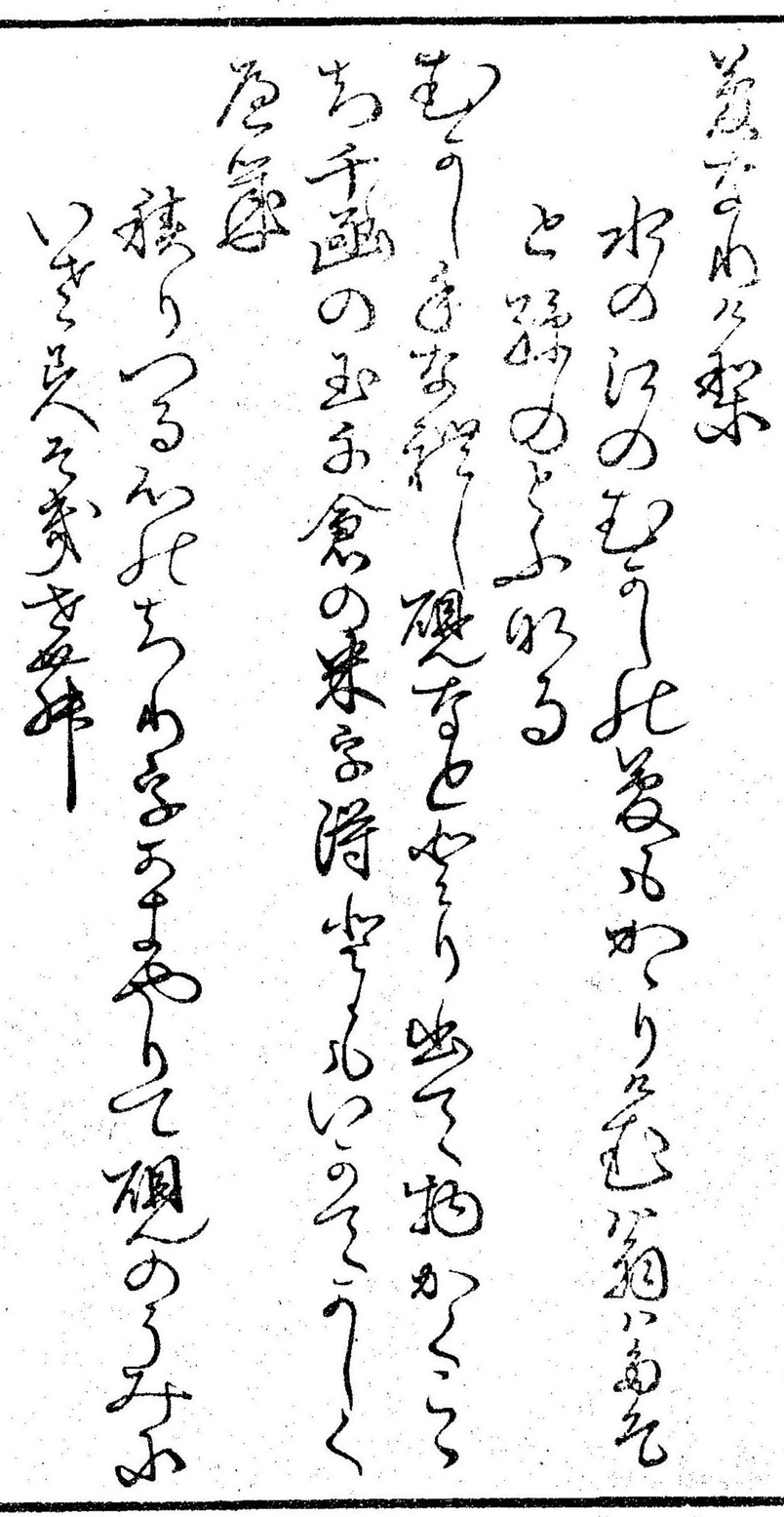
とのこゝろのひ新年の

ふ生ひ出ひとるへくこゝ思ひ重りし事ふた

らうらふ者ひ物かの事よりしほうすれ

縁なくふあり知ある事をのく人となりてこゝ

雖そ思ひたそと思ひのなわけふ学の中も



明治十年二月十四日出版御届
同年三月十五日出版

著述人　和歌山縣士族　伊達自得　第六大區四小區西六間堀町四十九番地
出版人　廣島縣平民　山内瑞圓　第一大區九小區尾張町二丁目十八番地

東京尾張町二丁目　明教書肆
同下谷町二丁目　尚古堂
大阪高麗橋二丁目　明教書肆支店　関口清吉
西京五条通冨小路　同支店　狩野忠次郎

發兌
處